

浮舟

渋谷栄一訳

第一章 匂宮の物語 匂宮、大内記から薫と浮舟の関係を聞き知る

「第一段 匂宮、浮舟を追想し、中君を恨む」

は、今もなお、あのちらつと御覧になつた夕方をお忘れになる時とてない。たいした身分ではけつしてなさそうであつたが、人柄が誠実で魅力的であつたなあ」と、とても浮気なご性分にとつては、残念なところで終わつてしまつたことだ」と、悔しく思われなさるままに、女君に対しても、

「あのよつに、ちよつとしたことぐらいで、むやみに、このよつな方面の嫉妬をなさるなあ。思いがけなく情けない」

と、悪口言つて恨み申し上げなさる時々は、とてもつらくて、ありのままに申し上げてしまおうかしら」とお思いになるが、

「重々しい様子にはお扱いなさらないよつだが、いいかげんでない扱いに、心とめて人が隠していらつしやる女を、おしゃべりに申し上げてしまつよつなもの、そのまま聞き流しなさるよつなご性分の方ではいらつしやるよつだ。」

仕えている女房の中でも、ちよつと何かおつしやり關係を持つとお思いになつた者にはすべて、身分柄あつてはならない実家までお尋ねあそばすご体裁の良くないご性分なので、あれほど月日を経て、お思い込んでいらつしやるあたりの女は、女房の場合以上にきつと見苦しいことを引き起こしなさるだろう。他から伝え聞きなさるのはどうすることもできない。

どちらにとつてもお気の毒ではあつても、それを防げる方のご性分でないので、他人の場合よりは聞きにくいなどとばかりに思われるだろう。ど

うなるにせよ、自分からの過失にはするまい」

と思ひ返しなさつては、お気の毒には思うが申し上げなさらず、嘘をついてもつともらしく言いつくろつことは、おできになれないので、黙りとおして嫉妬する、世の常の女になつていらつしやつた。

「第二段 薫、浮舟を宇治に放置」

あの方は、たとえよつもなくのんびりと構えていらつしやつて、待ち遠しいと思つているだろう」と、お気の毒にはお思いやりになりながら、窮屈な身の上を、適当な機会がなくては、たやすくお通いになれる道ではないので、神が禁じている以上に困つている。けれども、

「いずれはたいそうよく扱つてやろつ」と思つ。山里の慰めと思つていた考えがあるが、少し日数のかかりそつな事柄を作り出して、のんびりと出かけて行つて逢おつ。そうして、しばらくの間は誰も知らない住処で、だんだんとそのよつなことで、あの女の気持ちも馴れさせて、自分にとつても、他人から非難されないうつに、自立たぬよつにするのがよいだろう。

急に迎えて、誰だろう、いつからだろつ、などと取り沙汰されるのも、何となく煩わしく、当初の考えと違つてこよつ。また、宮の御方がお聞きになつてご心配になることも、もとの場所をきつぱりと離れて連れ出し、昔を忘れてしまつたよつな顔なのも、まことに不本意だ」

などと冷静に考えなさるのも、例によつて、のんびりと構え過ぎた性分からであろつ。引越させせる所をお考えおいて、こつそりと造らせなさるのであつた。

「第三段 薫と中君の仲」

少し暇がないよつにおなりになつたが、宮の御方に対しては、やはりたゆまずお心寄せ申し上げなことは以前と同じよつである。拝見する女房も不思議なまでに思つているが、世の中をだんだんとお分かりになつてきて、他人の様子を見たり聞いたりなさるにつけて、この人こそは本当に

昔を忘れない心長さが、引き続いて浅くない例のようだ」と、感慨も少ない。

成人なさっていくにつれて、人柄も評判も、格別でいらっしゃるので、宮のお気持ちがあまりに頼りなさそうな時には、

「思いもかけなかつた運命であつたわ。亡き姉君がお考えおいたとおりでもなく、このように悩みの多い結婚をしてしまつたことよ」

とお思いになる時々も多かつた。けれども、お会いなさることは難しい。年月もあまりに昔から遠ざかつてきて、内々のご事情を深く知らない女房は、普通の身分の人なら、これくらいの縁者を求めて親交を忘れないのも、ふさわしいが、かえつて、このように高い身分では、一般と違つた交際も、気がひけるので、宮が絶えずお疑いになつてゐるのも、ますますつらくご遠慮なさりながら、自然と疎遠になつてゆくのを、それでも絶えず、同じ気持ちがお変わりにならないのであつた。

宮も、浮気っぽい性質は、厭わしいところも混じつてゐるが、若君がとてかわいらしく成長なさつてゆくにつれて、他にはこのような子も生まれないのではないかしら」と、格別大事にお思ひになつて、気のおけぬ親しい夫人としては、正室にまさつてご待遇なさるので、以前よりは少し悩み事も落ち着いて過ごしていらつしやる。

「第四段 正月、宇治から京の中君への文」

正月の月上旬が過ぎたころにお越しになつて、若君が一つ年齢をおとりになつたのを、相手にしてかわいがつていらつしやる昼ころ、小さい童女が、緑の薄様の包紙で大きいのに、小さい鬚籠を小松に結びつけてあるのや、また、きちんとした立文とを持って、無邪気に走つて参る。女君に差し上げると、宮は、

「それは、どこからのですか」

とおつしやる。

「宇治から大輔のおとどにと言つたが、いないので困つていましたのを、いつものように、御前様が御覧になるだろうと思つて、受け取りました」と言つのも、とても落ち着きのないふうなので、

「この籠は、金属で作つて色を付けた籠でしたのだわ。松もとてもよく本物に似せて作つてある枝ですよ」

と、笑顔で言い続けるので、宮もにっこりなさつて、

「それでは、わたしも鑑賞しようかね」

とお取り寄せになると、女君は、とても見てもらえない気持ちがなさつて、

「手紙は、大輔のもとにやりなさい」

とおつしやる。お顔が赤くなつてゐるので、宮は、大将がさりげなくよこした手紙であろうか、宇治からと名乗るのもいかにもらしい」とお思ひつきになつて、この手紙をお取りになつた。

とはいえず、もし本当にそれであつたら」とお思ひになると、たいそう気がひけて、

「開けてみますよ。お恨みになりますか」

とおつしやる。

「みつともありません。どうして、女房どうしの間でやりとりしてゐる氣を許した手紙を、御覧になるのでしょうか」

とおしやるが、あわてない様子なので、

「それでは、見ますよ。女性の手紙とは、どんなものかな」

と言つてお開けになると、とても若々しい筆跡で、

「ご無沙汰のまま、年も暮れてしまいました。山里の憂鬱さは、峰の霞も絶え間がなくて」

とあつて、端の方に、

「これも若宮様の御前に。不出来でございませうが」

と書いてある。

「第五段 匂宮、手紙の主を浮舟と察知す」

特に才気があるようには見えないが、心当たりがないので、お目を凝ら

して、この立文を御覧になると、なるほど女性の筆跡で、

「年が改まりましたが、いかがお過しでしょうか。あなた様ご自身におかれまして、どんなに楽しくお喜びが多いこととございませう。」

「こちらでは、とても結構なお住まいで行き届いておりますが、やはり、不似合いに存じております。こうしてばかり、つくづくと物思いにお耽りあそばすより他には、時々そちらにお伺いなさって、お気持ちをお慰めあそばしませ、と存じておりますが、気がねして恐ろしい所とお思いになって、嫌なこととお嘆きになっているようです。」

「若宮の御前にと申つて、卯槌をお贈り申し上げなさいませ。ご主人様が御覧にならない時に御覧下さいませ、とのことでございます。」

「と、こまごまと言忌もできずに、もの悲しい様子が見苦しいのにつけても、繰り返し繰り返し、変だと御覧になって、

「今はもう、おっしゃいなさい。誰からのですか」とお尋ねになると、

「昔、あの山里に仕えておりました女の娘が、ある事情があつて、最近あちらにいと聞きましました。」

と申し上げなされると、普通にお仕える女とは見えない書き方を心得ていらつしやるので、あの厄介なことがあると書いてあつたのでお察しになつた。

卯槌が見事な出来で、所在ない人が作つた物だと見えた。松の二股になつたところに、山橋を作つて、それを貫き通した枝に、

「まだ古木にはなつておりませんが、若君様のご成長を、心から深くご期待申し上げております。」

と、特にたいした歌でないなので、「あずつと思ひ続けている女のか」とお思いになると、お目が止まつて、

「お返事をなさい。返事しなくては情愛がない。隠さなければならぬ手紙でもあるまいに。どうして、ご機嫌が悪いのですか。去りましようよ。」

と言つて、お立ちになつた。女君は、少将などに向かつて、

「お気の毒なことになつてしまいましたね。幼い童女が受け取つたのを、他の女房はどうして気づかなかつたのでしょうか。」

などと、小声でおっしゃる。

「拝見しましたら、どうして、こちらへお届けしたりしまししょうか。ぜんたい、この子は思慮が浅く出過ぎています。将来性がうかがえて、女の子はおつとりとしているのが好ましいものです。」

「お静かに。幼い子を、叱りなさいませぬ。」

とおっしゃる。去年の冬、ある人が奉公させた童女で、顔がとてもかわいらしかったので、宮もとてもかわいがつていらつしやるのだつた。

「第六段 匂宮、大内記から薫と浮舟の關係を知る」

「ご自分のお部屋にお歸りになつて、

「不思議なことであつたな。宇治に大将がお通いになることは、何年も続いていると聞いていた中でも、こつそりと夜お泊まりになる時もある、と人が言つたが、実にあまりな故人の思い出の土地だからとて、とんでもない所に旅寝なさるのだらうこと、と思つたのは、あのような女を隠して置きなかつたからなのだらう。」

と合点なさることもあつて、ご学問のことでお使いになる大内記である者で、あちらの邸に親しい縁者がいる者を思い出しなかつて、御前にお召しになる。参上した。

「韻塞をしたいのだが、詩集などを選び出して、こちらにある厨子に積むように。」

などとお命じになつて、

「右大将が宇治へ行かれることは、相変わらず続いていますか。寺を、とても立派に造つたと言つね。何とか見られないかね。」

とおっしゃると、

「寺をたいそう立派に、莊嚴にお造りになつて、不断の三昧堂など、大変に尊くお命じになつた、と聞いております。お通いになることは、去年の秋ごろからは、以前よりも、頻繁に行かれると言います。」

下々の人びとがこつそりと申した話では、女を隠し据えていらつしやり、憎からずお思いになつてお仕える女なのでしょう。あの近辺に所領なさる所々の人が、皆ご命令に従つてお仕えております。宿直を担当させたりしては、京からもたいそうこつそりと、しかるべき事などお尋ねになります。どのような幸い人で、幸せながらも心細くおいでなのでしょう」と、ちょうどこの十二月のころに申していた、とお聞き致しました。」

と申し上げる。

「第七段 匂宮、薫の噂を聞き知り喜ぶ」

「とても嬉しいことを聞いたなあ」とお思いになって、

「はつきりと名前を、言わなかったか。あちらに以前から住んでいた尼を、お訪ねになると聞いていたが」

「尼は、渡廊に住んでおりますと言います。この女は、今度建てられた所に、こぎれいな女房なども大勢して、結構な具合で住んでおります」

と申し上げる。

「興味深いことだね。どのような考えがあつて、どのような女を、そのように据えていらしゃるのだろうか。やはり、とても好色なところがあつて、普通の人と似ていないお心なのだろうか。」

右大臣などが、この人があまりに仏道に進んで、山寺に、夜までややもすればお泊まりになるといふが、軽々しい行為だ」と非難なさと聞いたが、なるほど、どうしてそんなにも仏道にこつそり行かれるのだろうか。やはり、あの思い出の地に心を惹かれていと聞いたが、このようなわけがあつたのだ。

どうだ、誰よりも真面目だと分別顔をする人の方がかえつて、ことさら誰も考えつかないようなところがあるものだよ」

とおつしやつて、たいそうおもしろいとお思いになつた。この人は、あちらの邸でたいそう親しくお仕えている家司の婿であつたので、隠していらつしやることも聞いたのであろう。

「ご心中では、何とかして、この女を、前に会つたことのある女かどうか確かめたい。あの君が、あのように据えているのは、平凡で普通の女ではあるまい。こちらでは、どうして親しくしているのだろう。しめし合わせで隠していらつしやつたというのも、とても悔しい」と思われる。

第二章 浮舟と匂宮の物語 匂宮、薫の声をまねて浮舟の寢所に忍び込む

「第一段 匂宮、宇治行きを大内記に相談」

ただそのことを、最近はやや考え込んでいらつしやつた。賭弓や、内宴などが過ぎて、のんびりとした時に、司召などといつて、皆が夢中になつていゝことは、何ともお思いにならないで、宇治へこつそりとお出かけになることばかりを「思案なさる。この大内記は、期待するところがあつて、昼夜、何とかお氣に入つてもらおうと思つていゝとき、いつもよりは親しく召し使つて、

「たいへん難しいことではあるが、わたしの言つたことを、何とかしてくれないか」

などとおつしやる。恐縮して承る。

「たいそう不都合なことだが、あの宇治に住んでいゝらしい人は、早くにちらつと会つた女で、行く方が分からなくなつたのが、大将に捜し出された人と、思い当たるところがあるのだ。はつきりとは知る手立てもないが、ただ、物の隙間から覗き見して、その女が違つかと確かめたい、と思つ。まつたく誰にも知られない方法は、どうしたらよいだろうか」

とおつしやるので、「何と、やっかいな」と思つが、

「お出かけになることは、たいへん険しい山越えでございますが、格別遠くはございません。夕方お出かけあそばして、亥子の刻にはお着きになるでしょう。そうして、早朝にはお帰りあそばせましょう。誰か気づくとすれば、ただお供する者だけでございしょう。それも、深い事情はどうして分かりますしやう」

と申し上げる。

「そつだ。昔も一、二度は、通つたことのある道だ。軽々しいと非難されるのが、その評判が氣になるのだ」

と言つて、繰り返してんでもないことだと、自分自身反省なさるが、このようにまでお口に出されたので、お思い止めなさることはできない。

「第二段 宮、馬で宇治へ赴く」

お供に、昔もあちらの様子を知つていゝ者、二、三人と、この内記、その他には乳母子で蔵人から五位になつた若い者で、親しい者ばかりをお選びになつて、大将の、今日明日はよもやいらつしやるまい」などと、内記

によく調べさせなされて、「ご出立なさるにつけても、昔を思い出す。

「不思議なまでに心を合わせて連れて行ってくれた人に対して、後ろめたいことをするなあ」と、お思い出しになることもいろいろであるが、京の中でさえ、まるきり人の知らないお忍び歩きは、そうはいつでも、おできにならないご身分でいて、粗末な恰好に身をやつして、お馬でお出かけになる気持ちも、何となく恐ろしく気が咎めるが、知りたい気持ちは強いご性質なので、山深く入って行くにつれて、早く着きたい、どうであろうか、確かめることもなくて帰るようでは、物足りなく変なものであるう」とお思いになると、気が気でない思いがなさる。

法性寺の付近まではお車で、そこから先はお馬にお乗りになつたのであつた。急いで、宵を過ぎたところにお着きになつた。大内記が、様子をよく知っているあの邸の人に尋ねて知つていたので、宿直人がいる方には寄らないで、葦垣をめぐらした西面を、静かにすこし壊してお入りになつた。

大内記自身も何といつてもまだ見たことのないお住まいなので、不案内であるが、女房なども多くはいないので、寢殿の南面に燈火がちらちらとほの暗く見えて、そよそよと衣ずれの音がする。戻つて参つて、

「まだ、人は起きていますようでございます。直接、ここからお入りください」と、案内してお入れ申し上げる。

「第三段 勾宮、浮舟とその女房らを覗き見る」

静かに昇つて、格子の間があるのを見つけて近寄りなされると、伊予簾はさらさらと鳴るのが気が引ける。新しくこぎれいに造つてあるが、やはり荒つぱい造りで隙間があつたが、誰も来て覗き見はしまいかと、気を許して、穴も塞がず、几帳の帷子をうち懸けて押しやつていた。

燈火を明るく照らして、何か縫物をしている女房が、三、四人座つていた。童女でかわいらしいのが、糸を縫つている。この子の顔は、まずあの燈火で御覧になつた顔であつた。とつさの見間違いかと、まだ疑われたが、右近と名乗つた若い女房もいる。女主人は、腕を枕にして、燈火を眺めている目もとや、髪のこぼれかかつてる額つき、たいそう上品に優美で、対の御方にとてもよく似ていた。

この右近が、衣類を折り畳もつとして、

「こうしてお出かけあそばしたら、すぐにはお帰りあそばすわけにはいきませんが、殿は、今度の司召の間が終わつて、朔日ごろにはきつといらっしゃると、昨日のお使いも申していました。お手紙には、どのように申し上げなさいましたのでしょうか」

と言つが、返事もせず、たいそう物思いに沈んでいる様子である。

「来訪の折しも、身を隠していらっしゃるようなのは、困つたことです」と言つと、向かいにいた女房が、

「それでは、このようにお出かけになつたと、お手紙を差し上げなさるのがよいでしょう。軽々しく、どうして、何も言わずに、お隠れあそばせまじょう。ご参詣の後は、そのままこちらにお帰りあそばしませ。こうして心細いようですが、思い通りに気楽なお暮らしに馴れて、かえつて本邸の方が旅心地がするのではないのでしょうか」

などと言つ。また他の女房は、

「やはり、しばらくの間、こうしてお待ち申し上げなさるのが、落ち着いていて体裁がよいでしょう。京へなどとお迎え申されてから後、ゆつくりとして母君にもお会い申されませ。あの乳母が、とてもせつかちでいられて、急にこのような話を申し上げなさるのでしようよ。昔も今も、我慢してのんびりとしている人が、しまいには幸福になるといふことです」

などと言つようである。右近は、

「どうして、この乳母をお止め申さずになつてしまつたのでしょうか。年老いた人は、やつかない性質があるものですから」

と憎むのは、乳母のような女房を悪く言うようである。「なるほど、憎らしい女房がいた」とお思い出しになるのも、夢のような気がする。側で聞いていられないほど、うちとけた話をして、

「宮の上は、とてもめでたくご幸福でいらつしやる。右の大殿が、あれほど素晴らしいご威勢で、仰々しく大騒ぎなさるようだが、若君がお生まれになつて後は、この上なくいらつしやるようです。このような出しゃばり者がいらつしやらなくて、お心ものんびりと、賢明に振る舞つていらつしやることでありまじょう」と言つ。

と言つ。

「せめて殿さえ、真実愛してくださるお気持ちが変わらなかつたら、負ける
ことがありませんか」

「と言つのを、女君は、少し起き上がった、

「とても聞きにくいこと。他人であつたら、負けまいとも何も思いませんよ
うが、あのお方のことは口に出してはいけません。漏れ聞こえるようなこ
とがあつたら、申し訳ありません」
などと言つ。

「第四段 匂宮、薫の声をまねて浮舟の寢所に忍び込む」

「どの程度の親族であろうか。とてもよく似ている様子だな」と思い比べる
と、恥ずかしくなるほどの上品なところは、あの君はともこの上ない。こ
の人はただかわいらしくきめこまやかな顔だちがとも魅力的だ」。普通程
度の、不十分なところを見つけたような場合でさえも、あれほど会いたい
とお思い続けてきた人を、その人だと見つけて、そのままお止めになるよ
うなご性分でないで、その上すっかり御覧になったので、何とかしてこ
の女を自分のものになりたい」と、心もつわの空におなりになって、依然と
して見つめていらつしやると、右近が、

「とても眠い。昨夜も何となしに夜明けかしてしまつた。明朝早くにも、こ
れは縫つてしまおう。お急ぎあそばしても、お車は日が高くなつてから来
るでしよう」

「と言つて、作りかけていた縫物を持って、几帳に懸けたりなどして、う
たた寝の状態で寄り臥した。女君も少し奥に入つて臥す。右近は北面に行つ
て、しばらくして再び来た。女君の後ろ近くに臥した。

「眠たいと思つていたので、とても早く寝入つてしまつた様子を御覧になつ
て、他にどうしようもないので、こつそりこの格子を叩きなさる。右近
が聞きつけて、

「どなたですか」

「と言つ。咳払いをなさつたので、高貴な方の咳払いと気づいて、殿がい
らつしやつたのか」と思つて、起きて出た。

「とりあえず、ここを開けなさい」

とおつしやるので、

「変ですわ。思いがけない時刻でござりますこと。夜はたいそう更けました
ものを」

と言つ。

「どこそこへ外出なさる予定であると、仲信が言つたので、驚いてすぐ出て
来て。まことに困つたことであつた。とりあえず開けなさい」

とおつしやる声、たいそうよくお似せになって、ひっそりと言つので、別
人とは思ひも寄らず、格子を開けた。

「途中で、とてもひどい目に遭つたので、みつともない姿になっている。燈
火を暗くしなさい」

とおつしやるので、

「まあ、大変」

とあわて騒いで、燈火は隠した。

「わたしを、他の人には見せるな。来たからと言つて、誰も起こすな」

と、とてもたくみなお方なので、もともとわずかに似ているお声を、ま
たくあの方のご様子に似せてお入りになる。「ひどい目に遭つた姿だとお
しやつたが、どのようなお姿なのだろう」とお気の毒で、自分も隠れて拝見
する。

とてもほつそりとなよなよと装束をお召しになって、香の芳しいことも
劣らない。近くによつて、お召物を脱ぎ、馴れた顔でお臥せりになつたの
で、

「いつものご座所に」

などと言つが、何もおつしやらない。寝具を差し上げて、寝ていた女房た
ちを起こして、少し下がつて皆眠つた。お供の人などは、いつものように、
こちらでは構わない慣例になつているので、

「お志の深い、夜のご訪問ですこと」

「このようなご様子を、ご存知ないのよ」

などと、利口ぶる女房もいるが、

「お静かに。夜の声は、ささやく声が、かえつてうるさいのです」
などと言いながら眠つた。

女君は、「違う人だわ」と思つと、びつくりし大変だと思つが、声も出さ

せないようになさる。とても憚られる所でさえ、理不尽であつたお心なので、何ともいいようがない仕儀だ。初めから別人だと知っていたら、何とかあしらうすべもあつたろうが、夢のような気がするので、だんだんと、あの時のつらかつた、いく年月もの間を思い続けていた有様をおっしゃるの、その宮だと分かつた。

ますます恥ずかしくなつて、あの上の御ことなどを思うと、またどうすることもできないので、限りなく泣く。宮も、なまじ逢つたのがかえつてつらく、たやすく逢えそうにないことをお思いになつて、お泣きになる。

「第五段 翌朝、匂宮、京へ帰らず居座る」

夜は、どんどん明けて行く。お供の人が来て咳払いをする。右近が聞いて参上した。お出になる気持ちもなく、心からいとお思われて、再びいらつしゃることも難しいので、京では捜し求めて大騒ぎしようとも、今日一日だけはこうしていたい。何事も生きている間だけのことなのだ。今すぐにお出になることは、本当に死んでしまいそうにお思いになるので、この右近を呼び寄せて、

「まことに無分別と思われようが、今日はとても出て行くことができません。男たちは、この近辺の近い所に、適当に隠し控させなさい。時方は、京へ行つて、山寺に人目を忍んで行つてい」

「とつじつまが合うように、返事などさせよ」

とおっしゃるので、とても驚きあきれて、気づかなかつた昨夜の過失を思うと、気も動転してしまいそうなのを、落ち着けて、

「今となつては、どのようにあたふた騒いだところで、効ないし、また失礼である。困つた時にも、たいそう深く愛してくださつたのも、このような逃れがたかつたご運命なのであろう。誰がしたということでない」

と申し上げる。生意気なことを言つたとお思いになつて、わたしは、いく月も物思ひしたので、すっかり呆然としてしまつて、人が非難するのも注意することも分別できず、一途に思ひつめてゐるのだ。少しでも身の上を憚るような人が、このような出歩きは思ひ立ちましようか。お返事には、『今日は物忌です』などと言いなさい。人に知られてはならないことを、誰のためにも思いなさい。他のことは問題でない」

とおっしゃつて、この人が、世にも稀なくらいかわいく思われなさるままに、どのような非難もお忘れになつたのであろう。

「第六段 右近、匂宮と浮舟の密事を隠蔽す」

右近が出て来て、この声を出した人に、

「これこれとおっしゃっていますが、やはり、とても見苦しいなさりようです、と申し上げてください。驚くほど目にもあまるようなお振舞いは、どんなにお思いになつても、あなた方お供の人びとの考えでどうにでもなりましよう。どうして、この無分別にも宮をお連れ申し上げなつたのですか。無礼な行ないを致す山賊などが途中で現れましたら、どうなりましよう」と言つ。内記は、なるほど、とてもやつかないことであるなあ」と思つて立つている。

「時方とおっしゃる方は、どなたですか。これこれとおっしゃっています」と伝える。笑つて、

「お叱りなされるのが恐ろしいので、ご命令がなくても逃げ出しましょう。本当のところを申し上げますと、並々でないご愛情を拝見しますと、皆が皆、身を捨てて参つたのです。よいよい、宿直人も、皆起きたようです」と言つて急いで出て行つた。

右近は、人に知られないようにするには、どうだましたらよいものかと困りきつている。女房たちが起きたので、

「殿は、ある理由があつて、ひどくごそりといらつしゃつています様子を拝見しますと、道中で大変なことがあつたようです。お召物などを、夜になつてごそりと持参するように、お命じになつています」

「まあ、気味が悪い。木幡山は、とても恐ろしいという山ですよ。いつものように、お先も払わせなせうと、身を簡略にしていらつしやうしたので、まあ、大変なこと」

と言つので、

「お静かに、お静かに。下衆どもが、少しでも聞きつけたら、とても大変なことになるまじょう」

と言つてゐるが、嘘をつくのが恐ろしい。具合悪く、殿のお使いが来た時にはどのように言おうと、

「初瀬の観音様、今日一日が、無事で暮らせますよう」

と、大願を立てるのであった。

石山寺に今日参詣させようとして、母君が迎えに来るのであった。この邸の女房たちも皆精進潔斎をし、身を清めていたが、

「それでは、今日は、お出かけあそばすわけにはゆかないでしょう。とても残念なこと」

と言つ。

「第七段 右近、浮舟の母の使者の迎えを断わる」

日が高くなつたので、格子などを上げて、右近は近くにお仕えしていた。母屋の簾はみな下ろして、物忌など書かせて貼つておいた。母君も「自身でお出でになるかも知れないと思つて、夢見が悪かつたので」と理由をつけるのであった。御手水などを差し上げる様子は、いつものようであるが、介添えを不満にお思ひになつて、

「あなたが先にお洗いあそばしたら」

とおつしやる。女は、たいそう体裁よく奥ゆかしい人を見慣れていたので、束の間も逢わないでいると死んでしまふとぞと恋い焦がれている宮を、「愛情が深いとは、このような方を言つのであるらうか」と思い知られるにつけても、不思議な運命だわ。皆が、噂をきいたら、どのようにお思ひになるだらう」と、まずはあの宮の上のお気持ちを思い出し申し上げるが、

「素性を知らないので、返す返すもとても情けない。やはり、ありのままに

おつしやつて下さい。ひどく身分の低い人だと言つても、ますますいとおしく思われまじょう」

と、無理やりにお尋ねになるが、そのお返事は全然しない。他のことでは、とてもかわいらしく親しみやすい様子にお返事申し上げたりなどして、

言つままになるのを、とてもこの上なくかわいらしいとばかり御覧になる。日が高くなつたところに、迎えの人が来た。車二台、乗馬の人びとが、いつものように、荒々しい者が七、八人。男連中が大勢、例によつて、下品な感じで、ぺちやくちゃしゃべりながら入つて来たので、女房たちは体裁悪がりながら、

「あちらに隠れなさい」

と言わせた。右近は、どうしよう。殿がおいでになつてゐる、と言つた時、京にはそれほど身分の方がいらつしやる、いらつしやらないといふのは、自然と知られていて、隠せないこともかも知れない」と思つて、この女房たちにも、特に相談せずに、返事を書く。

「昨夜から穢れなかつて、とても残念なこととお嘆きになつていらつしやつたのですが、昨夜、悪い夢を御覧あそばしたので、今日一日はお慎みなさいと言つて、物忌をいたしております。返す返すも、残念で、悪夢が邪魔しているように拝見いたしております」

と書いて、人びとに食事をさせてやつた。尼君にも、

「今日は物忌で、お出かけなさいませぬ」

と言わせた。

「第八段 匂宮と浮舟、一日仲睦まじく過ごす」

いつもは時間のたつのも長く感じられ、霞んでいる山際を眺めながら物思ひに耽つていたのに、日の暮れて行くのが侘しいとばかり思い焦がれていらつしやる方に惹かれ申して、まことにあつけなく暮れてしまつた。誰に妨げられることのない長い春の日を、いくら見てもいて見飽きず、どこがと思われる欠点もなく、愛嬌があつて、慕わしく魅力的である。

その実は、あの対の御方には見劣りがするのである。大殿の姫君の女盛りで美しくいらつしやる方に比べたら、お話にもならないほどの女なのに、

二人といたいと思つていらつしやる時なので、「こんなによい女は他に知らない」とばかり思つていらつしやる。

女はまた一方、大將殿を、とても美しそうで他にこのような方がいるだろうかと思つていたが、情愛こまやかで輝くような美しさは、この上なくいらつしやるなあ」と思つた。

硯を引き寄せて、手習などをなさる。たいそう美しそうに書き遊んで、絵などを上手にたくさんお描きになるので、若い女心には、愛情も移ることである。

「思つにまかせず、お逢いになれない時は、この絵を御覧なさい」

と言つて、とても美しそうな男と女が、一緒に添い臥している絵を描きなさい、

「いつもこうしていたいですね」

などとおつしやるのにも、涙が落ちた。

「末長い仲を約束してもやはり悲しいのは、ただ明日を知らない命であるよ。まことにこのように思つのは、縁起でもないことだ。思ひのままに訪ねることがまつたくできず、万策めぐらすうちに、ほんとうに死んでしまひ思うに思われる。つらかったご様子を、かえつてどうして探し出したりしたのだからか」

などとおつしやる。女は、濡らしていらつしやる筆を取つて、

「心変わりなど嘆いたりしないでしよう。命だけが定めぬこの世と思つたのだらしたら」

とあるのを、心変わりするのを恨めしく思つようだ」と御覧になるにつけても、まことにかわいらしい。

「どのような人の心変わりを見てなのか」

などと、にっこりして、大將がここに連れて来なさいた当時のことを、繰り返し知りたくなつて、お尋ねになるのを、つらく思つて、

「申し上げられませんことを、このようにお尋ねになるとは」

と、恨んでいる様子も、若々しい。自然とそれは聞き出そう、とお思ひになる一方で、言わせたくなるのも困つたことだ。

「第九段 翌朝、匂宮、京へ帰る」

夜になつて、京へ遣わした大夫が帰参して、右近に会つた。

「後の宮からも使者が参つて、右の大殿もご不満を申されて、誰にも知らせぬお忍び歩きは、まことに軽々しく、無礼な行為に遭つてもあるのを、総じて、帝などがお耳にあそばすことも、わが身にとつてもまことにつらい」とひどくおつしやっていました。東山に聖僧にお会に行つたと、皆には申しておきました」

などと話して、

「女というものは罪深くいらつしやるものです。何でもない家来までうるさくおつしやつて、嘘までつかせなされるよ」

と言つて、

「聖と呼んでくださったのは、とても結構な。あなた個人の嘘をついた罪も、その功德で帳消しなさりましよう。ほんとうに、とても困つたご性質で、おつしやるとおつしやるといふどうしてそのような癖がおつきになつたのでしょうか。前々からこのようにいらつしやると聞いておりましたら、とても恐れ多いことですから、うまくお取り計らい申し上げましたでしょう。無分別なご外出ですこと」

と、お困り申す。

「帰参して、これこれです」と申し上げると、なるほど、どんなに騒いでいるだろう」と、ご想像になつて、

「窮屈な身分はつらいものだ。軽い身分の殿上人などで、しばらくいたいのだ。どうしたらよいだろうか。このように慎むべき外聞も、構つてはいられない。」

大將もどのように思つてあるのか。親しくて当然と言つてよいながら、不思議なまでに昔から親しい仲で、このような秘密が知られた時は、恥ずかしく、またどんなであるのか。

世のたとえに言つてもあるので、待ち遠しがらせている自分の怠慢を顧みず、あなたが恨まれなされるだろうとまで心配になります。まつたく誰にも知られぬ状態で、ここではない所にお連れ申し上げよう」

とおつしやる。今日までもここにじつとしていらつしやるわけにはいかない、お出にならうとするにも、魂は女の袖の中にお残しになつて行

くのであろう。

すっかり明けない前にと、供人たちは咳払いをしてお促し申す。妻戸まで一緒に連れてお出でになって、とても外にお出になれない。

「いったいどうしてよいか分からない。先に立つ涙が道を真暗にするので、」
女も、限りなく悲しいと思った。

「涙も狭い袖では抑えかねますので、どのように別れを止めることができませんようか」

風の音もとても荒々しく、霜の深い早朝に、お互いの衣装も冷たくなつた気がして、お馬にお乗りになるとき、引き返す気持ちのようで驚くほどつらいが、お供の人々が、「まったく冗談ではない」と思つて、ひたすら急がして出発させたので、魂の抜けた思いでお出になつた。

この五位の二人が、お馬の口取りとして仕えた。険しい山道をすっかり越えて、それぞれの馬に乗る。水際の氷を踏みならす馬の足音までが、心細く何となく悲しい。以前もこの道だけは、このような山歩きもなさつたので、「不思議な宿縁の山里だなあ」とお思いになる。

第三章 浮舟と薫の物語 薫と浮舟、宇治橋の和歌を詠み交す

「第一段 匂宮、二条院に帰邸し、中君を責める」

二条の院にお着きになって、女君がたいそう水臭くお隠しになつていたことが情けないので、気楽な方の部屋でお寝みになつたが、眠ることがおできになれず、とても寂しく物思いがまさるので、心弱く対の屋にお渡りになつた。

何があつたとも知らずに、とても美しくそつにいらつしやる。「又となく魅力的だと御覧になつた人よりも、またこの人はやはり類稀な様子をしていらつしやつた」と御覧になる一方で、とてもよく似ているのを思い出しなされるにも、胸が塞がる思いがして、ひどく物思いをなさつている様子で、御帳台に入つてお寝みになる。女君もお連れ申してお入りになつて、「気分がとても悪い。どうなるのだろうか」と、心細い気がする。わたしは、ど

んなにも深く愛していても先立つてしまつたら、お身の上はまことすぐになつてしまつてしまふでしょうね。人の思いは、きつと通るものですからね」

とおつしやる。「ひどいことを、真面目になつておつしやるわ」と思つて、

「このように聞きずらいことが漏れ聞こえたら、どのように申し上げたのかと、あちらもお考えになりましょうことが、たまりません。不運の身には、いい加減な冗談もとてもつらいので、」

と言つて、横をお向きになつた。宮も、真面目になつて、

「ほんとうにつらいとお思い申し上げることがあるのは、どのようにお思いになるでしょう。わたしは、あなたにとっていい加減な人でしょうか。誰もが、めつたにいない人だなどと、言い立てるくらいです。誰かに比べてこの上なく見下しなされるようだ。誰もそのような運命なのだろうと、自然と理解されるが、隔てなされるお気持ちの強いのが、とても情けない」

とおつしやるにつけても、「宿世が並々でなく、探し出したのだ」と思ひ出されると、自然と涙ぐまれた。真剣なお姿を、「お気の毒で、どのようなことをお聞きになつたのだろう」とはつとさせられるが、お答え申し上げなされる言葉もない。

「ちょっとした関係で結婚なさつたので、どんなことも軽い気持ちで推量なさるのであろう。縁故もない人を頼みにして、その好意を受け入れたりしたのが過ちで、軽く扱われる身なのだ」とお思い続けるのも、何かと悲しくて、ますます可憐な様子である。

「あの人を見つけたことは、しばらくの間はお知らせ申すまい」とお思いなので、「他の事に思わせて恨みなされるのを、ひたすらこの大将の事を真剣になつておつしやる」とお思いになると、「誰かが嘘を真実のように申し上げたのだろう」などとお思いになる。事実か否かを確かめない間は、お会い申すのも恥ずかしい。

「第二段 明石中宮からと薫の見舞い」

内裏から大宮のお手紙が来たので、驚きなさつて、やはり釈然としない様子で、あちらにお渡りになつた。

「昨日の心配したことよ。」気分悪くいらつしやつたそうですが、悪くない

ようでしたら参内なさい。久しく見えませんこと」

などというように申し上げなされたので、大げさに心配していただくのもつらいけれど、ほんとうにご気分も正気でないようで、その日は参内なさらない。上達部などが、大勢参上なされたが、御簾の中でその日はお過ごしになる。

夕方、右大将が参上なされた。

「こちらに」

と言つて、寛いだ恰好でお会いなされた。

「ご気分がお悪い、ということとでございましたので、宮におかれましてとてもご心配あそばされています。どのようなご病気ですか」

とお尋ね申し上げなされる。お会いしただけで、お胸がどきどき高まつてくるので、言葉少なくて、聖めいているというが、途方もない山伏心だなあれほどかわいい女を、そのままにして置いて、何日も何日も待ちわびさせているとは「とお思ひになる。

いつもは、ほんの些細な機会でさえ、自分はまじめ人間だと振る舞い自称していらつしやるのを、悔しがりなされた、何かと文句をおつけになるのを、このような事を発見したのを、どうしておつしやらないだろうかけれども、そのような冗談もおつしやらず、とてもつらそうにお見えになるので、

「お気の毒なことです。大したご病気ではなくても、やはり何日も続くのはとてもよくないこととございます。お風邪を充分ご養生なさいませ」

などと、心からお見舞い申し述べてお出になられた。気のひけるほど立派な人である。わたしの態度を、どのように比較しただろう「などと、いろいろな事柄につけて、ひたすらあの女を、束の間も忘れずお思ひ出しになる。

あちらでは、石山詣でも中止になつて、まことに何もすることない。お手紙には、とてもつらい思ひをたくさんお書きになつてお遣りになる。それでさえ気が落ち着かず、時方」と言つて召し出した大夫の従者で、事情を知らない者をして遣わしたのであった。

「私め右近が古くから知っていた人で、殿のお供で訪ねて来まして、昔に縫りを戻して懇意になろうとするのです」

と、女房仲間には言い聞かせていた。何かと右近は、嘘をつくことになつ

たのであった。

「第三段 二月上旬、薫、宇治へ行く」

月が替つた。このようにお分かりになるが、お出かけになることはとても無理である。「こうして物思ひばかりしていたら、生きてもいられないよつなわが身だ」と、心細さが加わつてお嘆きになる。

大将殿は、少しのんびりしたころ、いつものように、人目を忍んでお出でになつた。寺で仏などを拝みなされる。御誦経をおさせになる僧に、お布施を与えたりして、夕方に、こちらには人目を忍んでだが、この人はひどく身を簡略になされるでもない。烏帽子に直衣姿が、たいそう理想的で美しく、歩んでお入りになるなり、こちらが恥ずかしくなり、心づかいが格別である。

女は、どうしてお会いできようかと、空にまで目があつて恐ろしく思われるので、激しく一途であつた方のご様子が、自然と思ひ出されると、一方で、この方にお会いすることを想像すると、ひどくつらい。

「私は今まで何年も会つていた女の思ひが、皆あなたに移つてしまひそうだ」とおつしやつたのを、なるほど、その後はご気分が悪いと言つて、どの方にもどの方にも、いつものような様子ではなく、御修法などと言つて騒いでいるというのを聞くと、また、どのようにお聞きになつてどのようにお思ひになるだろうか」と、思つにつけてまことにつらい。

この方はこの方で、たいそう感じが格別で、愛情深く、優美な態度で、久しく会わなかつたご無沙汰のお詫びをおつしやるのも、言葉数多くなく、恋しい愛しいと直接には言わないが、いつも一緒にいられない恋の苦しい気持ち、体裁よくおつしやるのが、ひどく言葉を尽くして言うよりもまさつて、たいそうしみじみと誰もが思うにちがいないような感じを身につけていらつしやる人柄である。やさしく美しい方面は無論のこと、将来末長く信頼できる性格などが、この上なくまさつていらつしやつた。

「心外なと思われる様子の気持ちなどが、漏れてお耳に入つた時は、とても大変なことになるであろう。不思議なほど正気もなく恋い焦がれている方を、恋しいと思つのも、それはとてもとんでもなく軽率なことだわ。この方

に嫌だと思われて、お忘れになるってしまう」心細さは、とても深くしみこんでいたので、思い乱れている様子を、途絶えていたこの幾月間に、すっかり男女の情理をわきまえ、成長したものだ。何もすることのない住処にいる間に、あらゆる物思いの限りを尽くしたのだらうよ」と御覧になるにつけても、気の毒なので、いつもより心をこめてお語りになる。

「第四段 薫と浮舟、それぞれの思い」

「造らせている所は、だんだんと出来上がって来た。先日、見に行ったが、こゝよりはやさしい感じの川があつて、花も御覧になれましよう。三条宮邸も近い所です。毎日会わないでいる不安も、自然と消えましようから、この春のころに、差し支えなければお連れしよう」

と思つておっしゃるのにつけても、あの方が、のんびりとした所を考えたつたと、昨日もおっしゃっていたが、このようなことをご存知なくて、そのようにお考えになつてゐることよ」と、心が痛みながらも、そちらに靡くべきではないのだ」と思うその一方で、先日のお姿が、面影に現れるので、自分ながらも嫌な情けない身の上だわ」と、思い続けて泣いた。

「お気持ち、このようでなくおつとりとしていたのが、のんびりと嬉しかった。誰かが何か言い聞かせたことがあるのですか。少しでも並々の愛情であつたら、こうしてわざわざやつて来ることができる身分ではないし、道中でもないのですよ」

などと言つて、初旬ころの夕月夜に、少し端に近い所に臥して外を眺めていらつしやうた。男は、亡くなつた姫君のことを思い出しなさつて、女は今から加わつた身のつらさを嘆いて、お互いに物思いする。

「第五段 薫と浮舟、宇治橋の和歌を詠み交す」

山の方は霞が隔てて、寒い洲崎に立つている鵜の姿も、場所柄かとても興味深く見えるが、宇治橋がはるばると見渡されるところに、柴積み舟があちこちで行き交つているのなどが、他の場所では見慣れないことばかり

があればこれやある所なので、御覧になる度ごとに、やはりその当時のことがまるで今のようない気がして、ほんとにそうでもない女を相手にする時でさえ、めつたにない逢瀬の情が多いにちがいないところである。

それ以上に、恋しい女に似ているのもこの上なく、だんだんと男女の情理を知り、都の女らしくなつてゆく様子がかわいらしいのも、すっかり良くなつた感じがなざるが、女は、あれこれ物思いする心中に、いつの間にかこみ上げてくる涙、ややもすれば流れ出すのを、慰めかねなさつて、

「宇治橋のように未長い約束は朽ちないから、不安に思つて心配なざるな。やがてお分かりになりましよう」

とおっしゃる。

「絶え間ばかりが気がかりでございませう宇治橋なのに、朽ちないものと依然頼りにしなさいとおっしゃるのですか」

以前よりもまことに見捨てがたく、暫くの間も逗留していただくお思いになるが、世間の噂がうるさいので、今さら長居をすべきでもない。気楽に会える時になつたら、などとお考えになつて、早朝にお帰りになつた。とても素晴らしく成長なつたな」と、おいたわしくお思い出しになること、今まで以上であつた。

第四章 浮舟と匂宮の物語 匂宮と浮舟、橋の小島の和歌を詠み交す

「第一段 二月十日、宮中の詩会催される」

二月の十日ころに、内裏で作文会を開催あそばすということ、この宮も大將も参内なつた。季節に適つた楽器の響きに、宮のお声は実に素晴らしく、梅が枝などを謡いなさる。何事も誰よりもこの上なく上手いらつしやる様子で、つまらないことに熱中なざることだけが、罪深いことであつた。

雪が急に降り乱れ、風などが烈しく吹いたので、御遊会は早く終わりになつた。この宮の御宿直部屋に、人びとがお集まりになる。食事を召し上がったりして、休んでいらつしやうた。

大将、誰かに何かおっしゃるうとして、少し端近くにお出になつたが、雪がだんだんと降り積もつたのが、星の光ではつきりとしないので、闇はわけが分からぬ」と思われる匂いや姿で、

「小さい筈に衣を独り敷いて今夜も宇治の姫君は待つてゐることだろう」と、ふと口ずさみなさつたのも、ちよつとしたことを口ずさんだのだが、妙にしみじみとした情感をそそる人柄なので、たいそう奥ゆかしく見える。

他に歌はいくらでもあろうに、宮は寝入つていたようだが、お心が騒ぐ。

「いい加減には思つていないようだ。独り寂しくいるだろうと、わたしだけが思ひやつてゐると思つたのに、同じ気持ちでゐるとは憎らしい。やるせない話だ。あれほどの元からの人をおいて、自分の方にいつその愛情を、どうして向けることができようか」

と悔しく思わずにはいらつしやれない。

早朝、雪が深く積もつたので、詩文を献上しようとして、御前に参上なさつたご器量は、最近特に男盛りで美しそつに見える。あの君も同じくらしいの年齢で、もう二、三歳年長の違いからか、少し老成した態度や心配りなどは、特別に作り出したような、上品な男の手の本のようにいらつしやる。「帝の婿君として不足がない」と、世間の人も判断している。詩文の才能なども、政治向きの才能も、誰にも負けないでいらつしやつたのだから。

詩文の披講がすっかり終わつて、参会者皆が退出なさる。宮の詩文を優れてゐた」と朗誦して誉めるが、何ともお感じにならず、どのような気持ちで、こんなことをしているのか」と、ぼんやりとばかりしていらつしやつた。

「第二段 句宮、雪の山道の宇治へ行く」

あの方のご様子からも、ますますはつとなさつたので、無理な算段をしてお出かけになつた。京では、わずかばかり消え残つてゐる雪が、山深く入つて行くにつれて、だんだんと深く積もつて道を埋めていた。

いつもよりひどい人影も稀な細道を分け入つて行きなるとき、お供の人も、泣き出したほど恐ろしく、厄介なことが起こる場合まで心配する。案内役の大内記は、式部少輔を兼官していた。どちらの官も重々しくしていなければならぬ官職であるが、とても似合はしく指貫の裾を引き上げ

たりしている姿はおかしかった。

あちらでは、いらつしやるという知らせはあつたが、「このような雪ではまさか」と気を許してゐたところに、夜が更けてから右近に到着の旨を伝えた。「驚いたわ、まあ」と、女君までが感動した。右近は、「どのようにしまいにはおなりになるお身の上であろうか」と、一方では心配だが、今夜は人目を憚る気持ちも忘れてしまひそうだ。お断りするすべもないので、同じように親しくお思ひになつてゐる若い女房で、思慮も浅くない者と相談して、

「大変に困りましたこと。同じ気持ちで、秘密にしてください」

と言つたのであつた。一緒になつてお入れ申し上げる。道中で雪にお濡れになつた薫物の香りが、あたりせましく匂うのも、困つてしまひそうだが、あの方のご様子に似せて、ごまかしたのであつた。

「第三段 宮と浮舟、橋の小島の和歌を詠み交す」

夜のうちにお帰りになるのも、かえつて来なかつたほうがましなくらいだから、こちらの人目もとても憚れるので、時方に計略をめぐらせなつて、川向この人の家に連れて行く」と考へていたので、先立つて遣わしておいたのが、夜の更けるころに参上した。

「とてもよく準備してゐます」

と申し上げさせる。「これは、どうなさることか」と、右近もとても気がそぞろなので、寝惚けて起きている気持ちも、ぶるぶると震えて、正体もない。子供が雪遊びをしている時のように、震え上がつてしまつた。

「どうしてそのようになつたか」

などという余裕もお与えにならず、抱いてお出になつた。右近はこちらの留守居役に残つて、侍従をお供申させる。

実に頼りないものと、毎日眺めてゐる小さい舟にお乗りになつて、漕ぎ渡りなるとき、遙か遠い岸に向かつて漕ぎ離れて行つたような心細い気持ちにして、びたりとくつついて抱かれてゐるのを、とてもいじらしいとお思ひになる。

有明の月が澄み上つて、川面も澄んでゐるところに、

「これが、橋の小島です」

と申して、お舟をしばらくお止めになったので御覧になると、大きな岩のような恰好をして、しゃれた常盤木が茂っていた。

「あれを「覧なさい。とても頼りなさそうですが、千年も生きるにちがいない緑の深さです」

とおっしゃって、

「何年たつとも変わりません。橋の小島の崎で約束するわたしの気持ちは」

女も、珍しい所へ来たように思われて、

「橋の小島の色は変わらないでも、この浮舟のようわたしの身はどこへ行くのやら」

折柄、女も美しいので、ただもう素晴らしくお思いになる。

あちらの岸に漕ぎ着いてお降りになると、供人に抱かせなされるのは、とてもつらいので、お抱きになって、助けられながらお入りになるのを、とても見苦しく、どのような人を、こんなに大騒ぎなさっているのだらう」と拝見する。時方の叔父で因幡守である人が所領する荘園に、かりそめに建てた家なのであった。

まだとても手入れが行き届いていず、網代屏風など、御覧になったこともない飾り付けで、風も十分に防ぎきれず、垣根のもとに雪がまだらに消え残っていて、今でも曇っては雪が降る。

「第四段 句宮、浮舟に心奪われる」

日が差し出て、軒の氷柱が光り合っていて、宮のご容貌もいちだんと立派に見える気がする。宮も、人目を忍ぶやかいかいな道中で、身軽なお召物である。女も、上着を脱がさせなさっていたので、ほっそりとした姿つきがたいそう魅力的である。身づくろいすることもなくうちとけている様子を、とても恥ずかしく、眩しいほどに美しい方に向かい合っていることだわ」と思うが、隠れる所もない。

やさしい感じの白い衣だけを五枚ほど、袖口、裾のあたりまで優美で、色とりどりにたくさん重ねたのよりも美しく着こなしていた。いつも御覧になつていられる方でも、こんなにまでうちとけている姿などは御覧になつたこ

とがないので、こんなことまでが、やはり珍しく興味深く思われなされるのであった。

侍従も、大して悪くはない若い女房なのであった。この人までが、このような姿をすっかり見ているわ」と、女君は、たまらなく思う。宮も、

「この人は誰ですか。わたしの名前を漏らしてはなりませんよ」

と口がためなされるのを、とても素晴らしい」と思い申し上げていた。この宿守として住んでいた者、時方を主人と思ってお世話してまわるので、このいらっしやるごころの遣戸を隔てて、得意顔をして座っている。声を緊張させて、恐縮して話しているのを、返事もできないで、おかしいと思うのであった。

「たいそう恐ろしい占いが出た物忌によつて、京の内をさえ避けて慎むのだ。他の人を、近づけるな」と言っていた。

「第五段 句宮、浮舟と一日を過ごす」

人目も絶えて、気楽に話し合つて一日お過ごしになる。あの方がいらっしやつたときに、このようにお会いになっているのだらう」と、ご想像になつて、ひどくお恨みになる。二の宮をとても大切に扱つて、北の方としていらっしやるご様子などもお話しになる。あのお耳に止めなされた一言は、おっしゃらないのは憎いことであるよ。

時方が、御手水や、果物などを、取り次いで差し上げるのを御覧になつて、

「たいそう大切にされている客人は、そのような姿を他人に見られるでないぞ」

と戒めなされる。侍従は、好色っぽい若い女の考えから、とても素晴らしいと思つて、この大夫と話を一日暮らしたのであった。

雪が降り積もっているの、あのご自分が住む家の方を眺望なされると、霞の絶え間に梢だけが見える。山は鏡を懸けたように、きらきらと夕日に輝いているところに、昨夜、踏み分けて来た道のひどさなどを、同情を誘うようにお話しになる。

「峰の雪や水際の氷を踏み分けて、あなたに心は迷いましたが、道中では迷いません。木幡の里に馬はあるが」

などと、見苦しい硯を召し出して、手習いなさる。

「降り乱れて水際で凍っている雪よりも、はかなくわたしは途中で消えてしまひそうです」

と書いて消した。この「中空」をお咎めになる。なるほど、憎いことを書いたものだわ」と、恥ずかしくて引き破った。そうでなくても見る効のある様子、ますます感激して素晴らしいと、相手が心に思い込むようにと、あらん限りの言葉を尽くす様子、態度は、何とも表現のしようがない。

「第六段 匂宮、京へ帰り立つ」

御物忌を、二日とおだましになっていたので、のんびりとしたまま、お互いに愛しいとばかり、深くご愛情がまさって行く。右近は、いろいろと例によって、言い紛らして、お召物などを差し上げた。今日は、乱れた髪を少し梳かせて、濃い紫の袷に紅梅の織物などを、ちょうどよい具合に着替えていらっしやう。侍従も、見苦しい褶を着ていたが、美しいのに着替えたので、その装をお取りになって、女君にお着せになって、御手水の世話をおさせになる。

「姫宮にこの女を出させたら、どんなにか大事になさるだろう。とても高貴な身分の女性が多いが、これほどの様子をした女性はいないのではないか」

と御覧になる。みつともないほど遊び戯れながら一日お過ごしになる。じつそりと連れ出して隠そうということを、繰り返しおっしゃる。その間に、あの方に逢ったら承知しない」と、厳しいことを誓わせなさるので、実に困ったこと」と思つて、返事もできず、涙までが落ちる様子、全然目の前にいるときでさえもわたしに愛情が移らないようだ」と胸が痛く思われなさる。恨んだり泣いたり、いろいろとおっしゃって夜を明かして、夜深く連れてお帰りになる。例によって、お抱きになる。

「大切にお思いの方は、このようには、なさるまいよ。お分かりになりましたか」

とおっしゃると、お言葉のとおりだ、と思つて、うなずいて座っているのは、たいそういじらしげである。右近が、妻戸を開け放ってお入れ申し上げる。そのまま、ここで別れてお帰りになるのも、あかず悲しいとお思いになる。

「第七段 匂宮、二条院に帰邸後、病に臥す」

このような時の帰りは、やはり二条院においてになる。とても気分が悪くおなりになって、食事なども召し上がらず、日がたつにつれて青くお痩せになって、ご様子も変わるの、帝におかせられてもどちら様におかれても、お嘆きになり、ますます大騒ぎになって、お手紙さえこまごまと書くことがおできになれない。

あちらでも、あの利口ぶつた乳母は、その娘が子供を産む所に行つていたのが、帰つて来たので、気安く手紙を見ることもできない。このように見すばらしい生活を、ただあの殿がお世話くださるのを期待することで、母君も思い慰めていたが、日蔭の存在ながらも、近くにお移しになることをお考えになっていたの、とても安心で嬉しかるうことと思つて、だんだんと女房を求め、童女の無難な者などを迎えてお奇越しになる。

自分自身でも、それこそが、理想だと、初めからずつと待つていた」とは思いながらも、無理をなさる方のお事を思い出すと、お恨みになった様子、おっしゃった言葉などが、面影にびつたりと添ったまま、わずかにお寝みになると、夢に現れなさつて、とても嫌なまでに思われる。

第五章 浮舟の物語 浮舟、恋の板ばさみに、入水を思つ

「第一段 春雨の続く頃、匂宮から手紙が届く」

雨が降り止まないで、日数が重なるころ、ますます山路通いはお諦めになつて、たまらない気がなせるので、親が大切にされる子は窮屈なものとお思いになるのも恐れ多いことだ。尽きない思いの文をお書きになつて、

「眺めやうしているそちらの方の雲も見えないくらいに、空までが真つ暗になっている今日このごろの作しとです」

筆にまかせて書きすさびなさつたのも、見所があつて、美しそつである。特に大して重々しくはない若い気持ちでは、

「とてもこのような気持ちに惹かれるにちがいないが、初めから約束なさつた様子も、やはり何といつても、あの方は、やはりとても思慮深く、人柄が素晴らしく思われたのなども、男女の仲を知つた初めのうちだからであるうか、このような情けないことを聞きつけて、お疎みになつたら、どうして生きていられようか。

早く殿に迎えられるようにと氣を揉んでいる母親は、思いもかけないこととで、氣にくわないと、困ることであるう。このように熱心になつていらつしやる方は、また一方で、とても浮気なご性質とばかり聞いていたので、今は熱心であつても、またこのような状態で、京にお隠し据えなさつても、未長く情けをかける一人として思つてくださることにつけては、あの上がどのようなにお思ひになることやら。何事も隠しきれない世の中なのだから、不思議な事のおつた夕暮の縁だけで、このようにお尋ねになるようだ。

まして、自分が宮にかくまわれることになつても、殿がお知りにならないことがあるうか」

と次々と考えると、自分ながら、まちがいがあつて、あの殿に疎まれ申すのも、やはりつらいことであるう」とちよつと思ひ乱れている時、あの殿からお使者がある。

「第二段 その同じ頃、薫からも手紙が届く」

あれこれと見るのも嫌な氣がするので、やはり長々とあつた方を見ながら、臥せていらつしやると、侍従と、右近とが、顔を見合せて、

「やはり、心が移つたわ」

などと、声に出さないうで目で見ている

「無理もないこととです。殿のご器量を、他にいらつしやらないと見たが、こちらの宮のご容姿は大変なものでした。おふぎけになつていらした愛嬌は、わたしならば、これほどのご愛情を見ては、とてもこうしていられません。

後の宮様にでも出仕して、いつも拝見していたい」

と云う。右近は、

「安心できないお方ですよ。殿のご様子に勝る方は、誰がいらつしやいませうか。器量などは知りませんが、お心づかいや感じなどがね。やはり、このご関係は、とても見苦しいことですね。どのようにおなりあそばさうとするのでしようか」

と、二人で相談する。独りで考えるよりは、嘘をつくにもよい助けが出て来たのであつた。

後者のお手紙には、

「思い続けながら幾日にもなつたこと。時々、そちらからもお手紙をお書きになることが、理想的でしょう。並々には思つていません」

などと、端に、

「川の水が増す宇治の里人はどのようにお過ごしでしょうか。晴れ間も見せず長雨が降り続き、物思ひに耽つていらつしやる今日このごろ、いつもよりも、思ふことが多くて」

と、白い色紙で立文である。ご筆跡もこまやかで美しくはないが、書き方は教養ありげに見える。宮は、とても言葉数多いのを、小さく結んでいらつしやるのは、それぞれに興味深い。

「とりあえず、あれを。誰も見ていないうちに」

とお促し申す。

「今日は、お返事申し上げることができません」

と恥じらつて、手習に、

「里の名をわが身によそえると、山城の宇治の辺りはますます住みにくいことよ」

宮がお描きになつた絵を、時々見ては自然涙がこぼれた。このまま長く続くものではない」と、あれやこれやと考へてみるが、他には関係をすっかり断つてお逢ひしないのは、とても耐えられなく思われるのであるう。

「真つ暗になつて晴れない峰の雨雲のように、空にただよう煙となつてしまいたい。雲に混じつたら」

と申し上げたので、宮は、声を上げて泣かれる。死にたいとはいへ、恋しいと思つているらしい」とご想像なされるにも、物思ひに沈んでいる様子

ばかりが面影にお見えになる。

真面目人間は、のんびりと御覧になりながら、ああ、どのような思いでいるのだろう」と想像して、たいそう恋しい。

「寂しくわが身を知らされる雨が小止みもなく降り続くので、袖までが涙でますます濡れてしまいます」

とあるのを、下にも置かず御覧になる。

「第三段 匂宮、薫の浮舟を新築邸に移すことを知る」

女宮にお話などを申し上げた機会に、

「失礼なお思ひになるやもと、気がひけますが、そうはいつでも古くからの女がございましたが、賤しい所に放つて置いて、ひどく物思いに沈んでいるというのが気の毒なので、近くに呼び寄せて、と思つております。昔から人とは異なつた考えがございまして、世の中を、普通の人とは違つて過ごそうと思つておりましたが、このようにご結婚申して、一途には世を捨てがたいので、そんな女がいるとは知らせなかつた身分の低い者でさえ、気の毒で、罪障になりそうなきがいたしまして」

と、申し上げなされると、

「どのようなくちをお考えおいていらつしやるとも存じませんが」

と、お返事なされると、

「帝になど、良くないようにお耳に入れ申す人がございましょう。世間の人の噂は、まことにつまらない良くないものでございますよ。けれども、その女は、それほど問題にもならない女でございます」

などと申し上げなされると、

「新築した所に移そう」とお決めになつたが、「このようなための家だつたのだ」などと、ばあつと言ひ触らす人がいようかななどと、困るので、たいそう人目に立たないようにして、襖障子を張らせることなど、人もあるうちに、この大内記の妻の父親で、大蔵大輔という者に、親しいので気安く思つて、命令なさつていたので、妻を介して聞き知つて、宮にすっかり申し上げた。

「絵師連なども、御隨身の中にいる者で、親しい家人などを選んで、隠れ家といつても特別にお気をつけてなさつています」

と申すので、ますます胸騒ぎがなさつて、「自分の乳母で、遠国の受領の妻となつて下る家で、下京の方にあるのを、

「くく内密の女を、しばらく隠して置きたい」

とご相談があつたので、「どのような女であるのか」とは思うが、重大事とお思いでいられるのが恐れ多いので、「それではどうぞ」と申し上げた。この家を準備なさつて、少しお心が安心なされると、今月の晦日頃に、下向する予定なので、「すぐその日に女を移そう」とご計画なされると、

「これこれと思つている。決して他人に気づかれてはならぬ」

と言いやりなさつては、「ご自身がお出向きになることは、とても難しいところに、こちら宇治でも、乳母がともうるさいので、難しい旨をお返事申し上げる。」

「第四段 浮舟の母、京から宇治に来る」

大将殿は、四月の十日とお決めになつていた。誘つてくれる人がいたらどこへでも」とは思はず、とても変で、「どうしたらよい身の上だろうか」と浮いたような気持ちばかりがするので、母親のもとにしばらく出かけていたら、思案する時間がある」とお思いになるが、少将の妻が、子供を産む時期が近づいたということで、修法や、読経などでひっきりなしに騒がしいので、石山寺にも出かけるわけにゆかず、母親がこちらにお越しになつた。乳母が出て来て、

「殿から、女房の衣装なども、こまごまご心配いただきました。何とかきれいに何事も、と存じておりますが、乳母独りのお世話では、不十分なことしかできませんでございませう」

などとはいでいるのが、気持ちよさそうなのを御覧になるにつけても、女君は、

「とんでもない事がいろいろ起つて、物笑いになつたら、誰も彼もがどのように思つてあろう。無理無体におつしやる方は、また、幾重にも山深い所に隠れても、必ず探し出して、自分も宮も身を破滅してしまうだろう。やはり、気楽な所に隠れることを考えなさいと、今日もおつしやっているが、どうしたらよいだろう」

「と、気分が悪くて臥せっていらつしやうした。
」と云つて、「このようにいつもと違って、ひどく青く痩せていらつしやるの
でしようか」

と驚きなせる。

「この幾日も妙な具合ばかりです。ちょっとした食事も召し上がらず、苦し
そうにおいであそばします」

と云つて、「不思議なことだわ。物の怪などによるのであるうか」と、

「どのような気分かと心配ですが、石山詣でもお止めになった」
と云つのも、いたたまれない気がするので、まともに目を合わせられない。

「第五段 浮舟、母と尼の話から、入水を思う」

日が暮れて月がたいそう明るい。有明の空を思い出すと、涙がますます
抑えがたいのは、まことにけしからぬ心がけだ」と思う。母君、昔話など
をして、あちらの尼君を呼び出して、亡くなった姫君の様子、思慮深く
いらして、しかるべき事柄をお考えになっていた間に、目の前でお亡くな
りになったことなどを話す。

「生きていらつしやうたら、宮の上などのように、親しくお話し合ひさつて、
心細かつた方々の境遇が、とてもこの上なくお幸せでございましたよ
うに」

と云つにつけても、自分の娘として他人ではない。思い通りの運命がお続
きになつたら、負けるまいに」と思い続けて、

「いつもいつも、この君の事では、何かと心配ばかりしてきましたが、様子
が少しよくなつて、このように京にお移りなるようですから、こちらにやつ
て参ることに、特別にわざわざ思い立つこともございませう。このような
お目にかかつた折々に、昔の話を、のんびりと承りたく存じます」

などと話す。

「縁起でもない身の上とばかり存じておりましたので、こまごまとお目にか
かつてお話し申し上げますのも、どんなものかしらと、遠慮して過ごして
まいりましたが、見捨てて、お移りになりましたら、とても心細くございま
しょうが、このようなお住まいは、不安にばかり拝見してましたので、嬉し

いこととございませぬ。又となく重々しくいらつしやるらしい殿の様子
で、このようにお訪ね申し上げなつたのも、並々な愛情ではないと申し上
げたことがございしましたが、いい加減なことで、」と云つたので、

「先の事は分かりませんが、ただ今は、このようにお見捨てになることなく
おつしやるにつけても、ただお導きによるものと思ひ出し申し上げており
ます。宮の上が、もつたいたなくもお目をかけてくださいましたのも、遠慮
されることなどが、自然とございしたので、中途半端で身の置き所のない
方だ、と嘆きまして」

と云つて、尼君はにこりして、

「この宮の、とてもうるさいほどに好色でいらつしやるので、分別のある若
い女房は、お仕えにくそつで。だいたいは、とても素晴らしい様子ですが、
その方面のことで、上が失礼なお思いになるのが困つたことだと、大輔
の娘が話しておりました」

と云つにつけても、やはりそうか、それ以上にわたしは」と、女君は臥
せつて聞いていらつしやうした。

「第六段 浮舟、母と尼の話から、入水を思う」

「まあ、嫌らしいこと。帝のお姫様をお持ちになつていらつしやる方ですが、
他人なので、良いとも悪いともお咎めがあるうとなかうと、しかたのな
いことと、恐れ多く存じております。良くない事件を引き起こしなつた
ら、すべてわが身にとつては悲しく大変なことだと思ひ申し上げても、二
度とお世話しないでしよう」

などと話し合つてゐる内容に、ますます胸も潰れる思いがした。やはり、
自殺してしまおう。最後は聞きにくいことがきつと出て来ることだらう」と
思ひ続けると、この川の水の音が恐ろしそうに響いて流れて行くのを、

「こんな恐ろしくない流れもありますのにね。又となく荒々しい川の所に、歳
月をお過ごしになるのを、不憫とお思ひになるのも当然のこと」

などと、母君は得意顔で言つていた。昔からこの川の早くて恐ろしいこ
とを言つて、

「最近、渡守の孫の小さい子が、棹を差し損ねて川に落ちてしまいました。ゼンたい命を落とす人が多い川でございます」

と、女房も話し合っていた。女君は、

「それにしても、わが身の行く方が分からなくなったら、誰も彼もが、あつけなく悲しいと、しばらくの間はお思いになるであろうが、生き永らえて物笑いになって嫌な思いをするのは、いつ物思いがなくなるというのだらう」と、死を考えつくと、何の支障もないように、さっぱりと何事も思われるが、また考え直すと実に悲しい。母親がいろいろと心配し言っている様子に、寝たふうをしながらつくづくと思ひ心乱れる。

「第七段 浮舟の母、帰京す」

悩ましそくに臥せつていらつしやるのを、乳母にも言つて、

「しかるべき御祈祷などをなさいませ。祭や被などもするよう」

などと言つ。御手洗川で襖をしたい恋の悩みなのに、そうとも知らずにいろいろと言ひ騒いでいる。

「女房が少ないようだ。よい適当な所から尋ねて。新参者は残しなさい。高貴な方のご交際は、ご本人は何事もあつとりとお思いでしょうが、良くない仲になつてしまひそうな女房どうしは、厄介な事もきつとありましよう。表立たず控え目にして、そのような用心をなさい」

などと、氣のつかないことがないまでに注意して、

「あちらで病んでおります人も、氣がかりです」

と言つて帰るのを、とても物思いとなり、何事につけ悲しいので、再び

と会わずに、死んでしまつのか「と思つと、

「氣分が悪うございまして、お目にかかれませんが、とても不安に思われますので、少しの間でもお伺いしてたく存じます」

と慕つ。

「そのように思ひましても、あちらもとても何かと騒がしくございます。こちらの女房たちも、ちょっとしたことなどできそつもない、狭い所でございまして。武生の国府にお移りになつても、こつそりとお伺いしますから、人数ならぬ身の上では、このようなお方のために、お氣の毒でございます」

などと、泣きながらおつしやる。

第六章 浮舟と薫の物語 浮舟、右近の姉の悲話から死を願う

「第一段 薫と匂宮の使者同士出くわす」

殿のお手紙は今日もある。氣分が悪いと申し上げたので、いかな具合ですか」と、お見舞いくださいました。

「自分自身でと思つておりますが、止むを得ない支障が多くありまして。待つている間の身のつらさが、かえつて苦しい」

などである。宮は、昨日のお返事がなかつたのを、

「どのようにお迷いになつて居るのか。思わぬ方に靡くのかと氣がかりです。ますますばうつとして物思いに耽つております」

などと、こちらはたくさんお書きになつていた。

雨が降つた日、来合わせたお使い連中が、今日も来たのであつた。殿の御隨身は、あの少輔の家で時々見る男なので、

「あなたは、何しに、こちらに度々参るのですか」

と尋ねる。

「私用で尋ねる人のもとに参るのです」

と答える。

「私用の相手に、恋文を届けるとは、不思議な方ですね。隠しているのはなぜですか」

と尋ねる。

「本当は、わたしの主人の守の君が、お手紙を、女房に差し上げなさるので、

と言つので、返事が次々変わるので変だと思つが、ここではつきりさせるのも変なので、それぞれが参上した。

「第二段 薫、匂宮が女からの文を読んでいるのを見る」

才覚のある者なので、供に連れてくる童を、
「この男に、気づかれないように後をつけよ。左衛門大夫の家に入るかどうか」
と跡付けさせたところ、

「宮邸に参つて、式部少輔に、お手紙を渡しました」

と言つ。そこまで調べるものとは、身分の低い下衆は考えず、事情を深く知らなかつたので、隨身に発見されたのは、情けない話である。

殿に参上して、今お出かけになるうとすると、お手紙を差し上げさせる。直衣姿で、六条の院に、后宮が里下がりあそばしている時なので、お伺いなさるものだから、仰々しく、御前駆など大勢はいない。お手紙を取り次ぐ人に、

「不思議な事がございました。はつきりさせようと思つて、今までかかりました」

と言つのを、ちらつとお聞きになつて、お歩きになりながら、

「どのような事か」

とお尋ねになる。この取り次ぎが聞くのも憚れると思つて、遠慮している。殿もそうとお察しになつて、お出かけになつた。

后宮は、御不例でいらつしやるということ、親王方もみな参上なさつていた。上達部など大勢お見舞いに参つていて、騒がしいけれど、格別変わった御容態でもない。

あの大内記は太政官の役人なので、後れて参つた。あのお手紙を差し上げるのを、匂宮が、台盤所にいらして、戸口に呼び寄せてお取りになるのを、大將は、御前の方からお下がりになる、その横目でお眺めになつて、熱中なさつている手紙の様子だ」と、その興味深さに目がお止まりになつた。

「開いて御覧になつてゐるのは、紅の薄様に、こまこまと言つてあるらしい」と見える。手紙に夢中になつて、すぐには振り向きなさないで、大臣も席を立つて外に出てにいらつしやるので、この君は、襖障子からお出になるうとして、大臣がお出になります」と咳払いをして、ご注意申し上げなさる。

ちようどお隠しになつたところへ、大臣が顔をお出しになつた。驚いて襟元の入紐をお差しになる。殿は膝まずきなさつて、

「退出いたしました。御物の怪が久しくお起こりになりませんでした、恐ろしいことですね。山の座主を、さつそく呼びにやりましょう」と、忙しそうにお立ちになつた。

「第三段 薫、隨身から匂宮と浮舟の関係を知らされる」

夜が更けて、みな退出なさつた。大臣は、宮を先にお立て申し上げになつて、大勢のご息の上達部や、若君たちを引き連れて、あちらにお渡りになつた。この殿は遅れてお出になる。

隨身がいわくあげな顔をしていたのを、何かあるとお思ひになつたので、御前駆たちが引き下がつて松明を燈すころに、隨身を呼び寄せる。

「先程申したことは、何事か」

とお尋ねになる。

「今朝、あの宇治に、出雲権守時方朝臣のもとに仕えている男が、紫の薄様で、桜に付けた手紙を、西の妻戸に近寄つて、女房に渡しました。それを拝見しまして、これこれしかじかと尋ねましたら、返事がころころと変わり、嘘のような返事を申しましたので、どうしてそう申すのかと、子どもを使つて後をつけさせましたところ、兵部卿宮邸に参りまして、式部少輔道定朝臣に、その返事を渡しました」

と申す。君は、変だとお思ひになつて、

「その返事は、どのようになつて、返したか」

それは拝見できませんでした。別の方から出しました。下人の申したことで、赤い色紙で、とても美しいもの、と申しました」

と申し上げる。お考え合わせになると、びつたりである。そこまで見届けさせたのを、気が利いてゐると思ひになるが、人びとが近くにいるので、詳しくはおつしやらない。

「第四段 薫、帰邸の道中、思い乱れる」

帰途、やはり、実に油断のならない、抜け目なくいらつしやる宮である

よ。どのような機会に、そのような人がいるとお聞きになったのだろう。どのようにして言い寄りなされたのだろう。田舎めいた所だから、このような方面の過ちは、けつして起るまい、と思つていたのが浅はかだった。それにしても、わたしに関わりのない女には、そのような懸想をなされたもよいが、昔から親しくして、おかしいまでに手引して、お連れ申して歩いた者に、裏切つてそのような考えを持たれてよいものであるつか」と思つと、まことに氣にくわない。

「対の御方のことを、たいそういとしく思いながらも、そのまま何年も過して来たのは、自分の慎重さが、深かつたからだ。また一方では、それは今始まつた不体裁な恋情ではない。もともとの経緯もあつたのだが、ただ心の中に後暗いところがあつては、自分としても苦しいことになると思つてこそ、遠慮していたのも愚かなことであつた。

最近このように具合悪くなつて、不断よりも人の多い取り込み中に、どのようにしてはるばる遠い宇治までお書きやりになつたのだろうか。通い初めなされたのだろうか。たいそう遠い恋の通い路だな。不思議に思つていらつしやる所を尋ねられる日もあつた、と聞いたことだ。そのようなことにお苦しみになつて、どこそことなく悩んでいらつしやるのだろうか。昔を思い出すにつけても、お越しになれなかつたときの嘆きは、実にお気の毒であつた」

と、つくづくと思つと、女がひどく物思ひしている様子であつたのも、事情の一端がお分かり始めになると、あれこれと思ひ合わせると、実につらい。

「難しいものは、人の心だな。かわいらしくおつとりしているとは見えながら、浮気なところがある人であつた。この宮の相手としては、まことによい似合ひだ」

と譲つてもよい気持ちになり、身を引きたくお思ひになるが、北の方にする気持ちの女ならともかくも、やはり今まで通りにおこつたことを限りに会わなくなるのも、はたまた、恋しい氣がするであろう」と体裁悪いほど、いろいろと心中ご思案なさる。

「第五段 薫、宇治へ隨身を遣わす」

「自分が、嫌氣がさしたといつて、見捨てたら、きつと、あの宮が、呼び迎えなさる。相手にとつて、将来がお氣の毒なものも、格別お考えなさるまい。そのように寵愛なさる女は、一品宮の御方のもとに女房を、二、三人出させなさつたという。そのように、出させたのを見たり聞いたりするもの、氣の毒なことだ」

などと、やはり見捨てがたく、様子を見たくて、お手紙を遣わす。いつもの隨身を呼んで、ご自身で直接人のいない間に呼び寄せた。

「道定朝臣は、今でも仲信の家に通つてゐるのか」

「そのようでございます」と申す。

「宇治へは、いつもあの先程の男を使いにするのか。ひっそり暮らしている女なので、道定も思ひをかけるだらうな」

と、溜息をおつきになつて、

「人に見られないように行け。馬鹿らしいからな」

とおつしやる。緊張して、少輔がいつもこの殿の事を探り、あちらの事を尋ねたことも思ひ合わされるが、なれなれしくは申し出ることもできない。君も、下衆に詳しくは知らせまい」とお思ひになつたので、尋ねさせなさらない。

あちらでは、お使いがいつもより頻繁にあるのにつけても、あれこれ物思ひをする。ただこのようにおつしやっていた。

「心変わりするところとは知らずにいつまでも、待ち続けていらつしやるものと思つていました。世間の物笑ひになさらないでください」

とあるのを、とても変だと思つと、胸が真つ暗になつた。お返事を理解したように申し上げるのも氣がひける、何かの間違ひだらう具合が悪いので、お手紙はもとのように直して、

「宛先が違つように見えますので。妙に氣分がすぐれませんが、何事も申し上げられません」

と書き添えて差し上げた。御覽になつて、

「そつはいつても、うまく言い逃れたな。少しも思つてもみなかつた機転だな」

とにつこりなさるのも、憎いとは、お恨み切れないのであつた。

「第六段 右近と侍従、右近の姉の悲話を語る」

正面きつてではないが、それとなくおっしゃった様子を、あちらではますます物思いが加わる。結局は、わが身は良くない妙な結果になってしまひそつだ」と、ますます思っているところに、右近が来て、

「殿のお手紙は、どうしてお返しなさつたのですか。不吉にも、忌むものでございませぬものを」

「間違ひがあるように見えたので、宛先が違うのかと思ひまして」

とおっしゃる。変だと思つたので、道で開けて見たのであつた。良くない右近の態度です。見たとは言わないで、

「まあ、お気の毒な。難儀なお事でございます。殿は事情をお察しになつたのでしよう」

と言うと、顔がさつと赤くなって、何もおっしゃらない。手紙を見たとは思わないので、別のことで、あの方の様子を見た人が話したこと」と思うが、

「誰が、そのように言つたのか」

などとも尋ねることはできない。この女房たちが見たり思つたりするころも、ひどく恥ずかしい。自分の考えから始まつたことではないが、嫌な運命だなあ」と思ひ入つて寝ていると、侍従と二人で、

「右近めの姉で、常陸国で、男二人と結婚しましたが、身分は違つても、このようなものでございます。それぞれ負けない愛情なので、思ひ迷つておりました時に、女は、新しい男の方に少し気持ち動いたのでございませぬ。それを嫉妬して、結局新しい男を殺してしまつたのです。」

そうして自分も住んでいられなくなつたのでした。常陸国でも、大変惜しい兵士を一人失つた。また、過ちを犯した男も、良い家来であつたが、このような過ちを犯した者を、どうしてそのまま使うことができようか、ということ、国内を追放され、すべて女がよろしくないのだと言つて、館の内にも置いてくださらなかつたので、東国の人となつて、乳母も、今でも恋慕つて泣いておりますのは、罪深いものと拜見されます。

縁起でもない話のついででございますが、身分の上の方も下の者も、このようなことで、お悩みになるのは、とても悪いことです。お命ま

では関わらなくても、それぞれの方のご身分に関わることでございます。死ぬことにまさる恥ということも、身分の高い方には、かえつてございませぬことです。お一方にお決めなさい。

宮もご愛情がまさつて、せめて真面目にさえご求婚なさるならば、そちらに従いなさつて、ひどくお嘆きなさるな。瘦せ衰えなさるのもまことにつまらない。あれほど母上が大切に思つてお世話なさつておられるのを、乳母がこの上京のご準備に熱心になつて、大騒ぎしておりますにつけても、あちらよりもこちらに、とおっしゃつてくださる宮のことが、とてもつらくお気の毒です」

と言うと、もう一人は、

「まあ嫌な、恐ろしいことまでを申し上げなさいませぬ。何事もすべてご運命でしょう。ただお心の中で、少しでも気持ちの傾く方を、そうなるご運命だとお考えなさいませ。それにしても、まことに恐れ多く、たいそうなご執心であつたので、殿がどのように何かとご準備なさつておられることにもお心が動きませぬ。しばらくは隠れてでも、お気持ちがお傾きになる方に身をお寄せなさいませ、と存じます」

と、宮をたいそうお誉め申し上げる者なので、一途に言う。

「第七段 浮舟、右近の姉の悲話から死を願う」

「さあね。右近は、どちらにしても、ご無事にお過ごしなさいと、長谷寺や、石山寺などに願を立てています。この大将殿のご莊園の人びとという者は、たいそうな不埒な者どもで、一族がこの里にいつぱいいると言ひます。だいたい、この山城国、大和国に、殿がお持ちになつておられる所々の人は、みなこの内舎人という者の縁につながつておられるのでございませぬ。」

その婿の右近大夫という者を首領として、すべての事を決めて命令するそうです。身分の高い方のお間柄では、思慮のないことを仕出かすよ、とお思いにならなくても、考えのない田舎者連中が、宿直人として交替で勤めておられますので、自分の番に当たつて、ちよつとしたことも起こさせまいなどと、間違ひも起こしませぬよう。

先夜のご外出は、ほんとうに気味が悪く存じられました。宮は、どこま

でも人目をお避けになろうとして、お供の人も連れていらつしやらず、お忍び姿ばかりでいらつしやるのを、そのような者がお見つけ申したときには、とても大変なことになるまいか。」

と、言い続けるのを、女君、やはり、わたしを、宮に心寄せ申していると思つて、この女房たちが言っている。とても恥ずかしく、気持ちの上ではどちらとも思っていない。ただ夢のように茫然として、ひどくご執着なさっているのを、どうしてこんなにまで、と思つたが、お頼り申し上げて長い間になる方を、今になつて裏切ろうとは思わないからこそ、このように大変だと思つて悩むのだ。なるほど、よくない事でも起こつたときには「とつづくと思つていた。

「わたしは、何とかして死にたい。世間並に生きられないつらい身の上だわ。このような、嫌なことのある例は、下衆の中でさえ多くあるつか。」

と言つて、うつ臥しなされると、

「そんなに思い詰めなさいませぬ。お心安く思いなさいませ、と思つて申し上げたのでございます。お苦しみになることを、何げないふうにはかり、のんびりとお見えになるのを、この事件の後には、ひどくいらいらしていらつしやるので、とても変だと拝見しております。」

と、事情を知っている者だけは、みな心配しているのだが、乳母は、自分一人満足そうにして、染物などをしていた。新参の童女などで無難なのを呼んで、

「このような方を御覧なさい。変なことばかりに臥せつていらつしやるのは、物の怪などが、お邪魔申し上げようとするのでしょう。」と嘆く。

第七章 浮舟の物語 浮舟、匂宮にも逢わず、母へ告別の和歌を詠み残す

「第一段 内舎人、薫の伝言を右近に伝える」

殿からは、あの先日の返事をさえおつしやらずに、幾日も過ぎた。この恐ろしがらせた内舎人という者が来た。なるほど、たいそう荒々しく不格好に太つた様子をした老人で、声も嗄れ、何といつても凄そつなのだが、

「女房に、お話申し上げたい。」

と言わたので、右近が会つた。

「殿からお呼び出しがございましたので、今朝参上しまして、たつた今、歸つて参りました。雑事などをお命じになつた折に、こうしてここにいらつしやる間は、夜中、早朝の間も、わたくしどもがこうしてお勤め申している、とお思ひになつて、宿直人を特にお差し向け申し上げることもなかつたが、最近お耳になさるには、

『女房のもとに、素性の知れない者供が通つていようにお聞きになつたことがある。不届きなことである。宿直に仕える者供は、その事情を聞いていよう。知らないでは、どうしていられよう。』

とお尋ねあそばしたのが、全然知らないことなので、

『わたくしは病気が重くございまして、宿直いたしますことは幾月も致しておりませんので、事情を知ることができません。しかるべき男どもは、急げることなく警護させておりますのに、そのようなもつてのほかのことがございますのを、どうして知らないでいられましょう。』

と申し上げさせました。氣をつけてお仕えなさい。不都合なことがあつたら、嚴重に処罰なさる旨のご命令がございますので、どのようなお考えなのかと、恐ろしく存じております。」

と言つのを聞くと、鼻が鳴くのも、とても恐ろしい。返事もしないので、

「そうか。申し上げたことに違わないことをお聞きあそばせ。事の真相をお察しになつたようです。お手紙もございませぬよ。」

と嘆く。乳母は、ちらつと聞いて、

「とても嬉しいことをおつしやつた。盗賊が多いという所で、宿直人も最初のころのようではありません。みな、代理だと言つては、変な下衆ばかりを差し向けていたので、夜回りさえできなかつたが」と喜ぶ。

「第二段 浮舟、死を決意して、文を処分す」

女君は、なるほど、今はまことに悪くなつてしまつた身の上のようだとお思ひになつているところに、宮からは、

「いかがですか、いかがですか」

と、苔が乱れるような無理なことをおっしゃるの、とても厄介である。

「どちらにしても、それぞれの方につけて、とても嫌なことが出て来よう。自分一人がいなくなるのが最もよいようだ。昔は、懸想する男の気持ち、どちらとも決められないのに思いわずらって、それだけで身を投げた例もあった。生き永らえたら、きつと嫌な目に遭ってしまいそうな身で、死ぬのに、どうして惜しい身であろう。親も少しの間は嘆きなさるうが、大勢の子供の世話で、自然と忘れよう。生きながら間違いを犯し、物笑いな様子でうるうるしては、それ以上の物思いになろう」

などと思うようになる。子供つぼくおっとりとして、たおやかに見えるが、気品高く貴族社会の様子を知ること少なくて育つた人なので、少し乱暴なことを、考えついたのであろう。

厄介な反故などを破つて、大げさになるような一度には始末せず、灯台の火で焼いたり、川に投げ入れさせたりなど、だんだん少なくて行く。事情を知らない御達は、京へお引越しになるので、退屈な日々を送るうちに、いつしか書き集めなすつた手習などを、お破り捨てになるのだらう」と思う。侍従などは、見つけた時には、

「どうして、このようなことをあそばします。愛し合つていらつしやるお間柄で、心をこめてお書き交わしなすつた手紙は、他人にはお見せあそばさなくても、何かの箱底におしまいあそばして御覧になるのが、身分相応に、とても感慨深いものでございます。あれほど立派な紙を使い、恐れ多いお言葉のあらん限りをお尽くしになったのを、あのようにばかりお破りあそばすのは、情けないこと」と

と言う。

「いいえどうして。厄介な。長生きできそうにない身の上のようです。落ちぶれ残つて、相手の方にとつてもお気の毒でしょう。利口ぶつてお手紙を残しておいたものなどと、漏れ聞きなされたら、恥ずかしい」

などとおしゃる。心細いことを思い続けていくと、再び決心ができなくなるのであった。親を残して先立つ人は、とても罪障深いと言うものをなとど、やはり、かすかに聞いたことを思う。

「第三段 三月二十日過ぎ、浮舟、匂宮を思い泣く」

二十日過ぎにもなった。あの家の主人が、二十八日に下向する予定である。匂宮は、

「その夜にきつと迎えよう。下人などに、様子を気づかれないように注意なさい。こちらの方からは、絶対漏れることはない。疑いなさるな」

などとおっしゃる。そうして、無理をしておいでになつたとしても、もう一度何も申し上げることができず、お目にかかれぬままお帰し申し上げることよ。また、束の間でも、どうしてここにお近づけ申し上げることができよう。効なく恨んでお帰りになろう」その様子を想像すると、いつものように、面影が離れず、始終悲しくて、このお手紙を顔に押し当てて、しばらくの間は我慢していたが、とてもひどくお泣きになる。

右近は、

「姫君様、このような様子に、終いには周囲の人もお気づき申そう。だんだんと、変だなどと思う女房がござりますようです。このようにくよくよなさらずに、適当にご返事申し上げます。右近がおります限りは、大それたこともうまく処理いたしましたら、これほど小さい身体一つぐらいは、空からお連れ申し上げなさいませう」

と言う。しばし躊躇して、

「このようにばかり言うのが、とても情けない。たしかにそうなつてもよいこと、と思つてゐるならともかくも、とんでもないことだ、とすっかり分かつてゐるのに、無理に、このようにばかり期待してゐるようにおつしやるので、どのようなことをし出かしなさるうとするのかなど、思うにつけても、身がとてもつらいのです」

と云つて、お返事も差し上げないでしまわれた。

「第四段 匂宮、宇治へ行く」

匂宮は、こうしてばかり、依然として承知する様子もなくて、返事までが途絶えがちになるのは、あの人が、適当に言い含めて、少し安心な方に心が落ち着いたのだらう。もっともなことだ」とはお思いになるが、たいそ

う残念で悔しく、

「それにしても、わたしを慕っていたものを。逢わない間に、女房が説き聞かせた方に傾いたのであろう」

などと物思いなさると、恋しさは晴らしようもなく、むなしい空にいっぱい満ちあふれた気がなされるので、いつものように、大変なご決意でおいでになった。

葦垣の方を見ると、いつもと違って、

「あれは、誰だ」

と言う声々が、目ざとげである。いったん退いて、事情を知っている男を入れたが、その男までを尋問する。以前の様子と違っている。やっかいになって、

「京から急のお手紙です」

と言う。右近は従者の名を呼んで会った。とても煩わしく、ますますやっかいに思う。

「全然、今夜はだめです。まことに恐れ多いことで」

と言われた。宮は、「どうして、こんなによそよそしくするのだらう」とお思いになると、たまらなくなつて、

「まず、時方が入つて、侍従に会つて、しかるべくはからえ」

と言つて遣わす。才覚ある人で、あれこれ言い繕つて、探し出して会つた。

「どうしたわけでありましょう。あの殿がおつしやることがあると云つて、宿直にいる者どもが、出しゃばつてるところで、まことに困っているのです。御前におかれても、深く思い嘆いていらつしやるらしいのは、このようなご訪問のもつたいなさを、悩んでいらつしやるのだ、とお気の毒に拝しております。全然、今晚はだめです。誰かが様子に気づきましたら、かえつてまことに悪いことになりましょう。そのまま、そのようにお考えあそばしている夜には、こちらでも誰にも知られず計画しまして、ご案内申し上げましょう」

乳母が目ざといことなども話す。大夫、

「おいでになつた道中が大変なことで、ぜひにもというお気持ちなので、はりあいもなくお返事申し上げるのは、具言が悪い。それでは、さあ、いらつ

しゃい。一緒に詳しく申し上げましょう」と誘つた。

「とても無理です」

と言ひ合ひをしているうちに、夜もたいそう更けて行く。

「第五段 匂宮、浮舟に逢えず帰京す」

宮は、御馬で少し遠くに立つていらつしやつたが、里めいた声をした犬どもが出て来て吠え立てるのも、たいそう恐ろしく、供回りが少ないうえに、たいそう簡略なお忍び歩きなので、おかしな者どもが襲いかかつて来たら、どうしよう」と、お供申している者たちはみな心配していたのであつた。

「もつと、早く早く参らう」

とつるさく言つて、この侍従を連れて上がる。髪は、脇の下から前に出して、姿がとても美しい人である。馬に乗せようとしたが、どうしても聞かないので、衣の裾を持つて、歩いて付いて来る。自分の沓を履かせて、自分分は供人の粗末なのを履いた。

参上して、「これこれです」と申し上げると、相談しようにも適当な場所がないので、山家の垣根の茂つた葎のもとに、障泥という物を敷いて、お下ろし申し上げる。「ご自身のお気持ちにも、変な恰好だな。このような道につまずいて、これといった、将来とても期待できそうにない身の上のようだ」と、お思い続けると、お泣きになることこの上ない。

気弱な女は、それ以上にほんとうに悲しいと拝見する。大変な敵を鬼にしたとしても、いいかげんには見捨てることのできないご様子の人である。躊躇なさつて、

「たった一言でも申し上げることはできないのか。どうして、今さらこうなのだ。やはり、女房らが申し上げたことがあるのだらう」

とおつしやる。事情を詳しく申し上げて、

「いずれ、そのようにお考えになつてゐる目を、事前に漏れないように、計らいなさいませ。このように恐れ多いことを拝見いたしておりますと、身を捨ててもお取り計らい申し上げましょう」

と申し上げる。「ご自身も人目をひどくお気になさつてゐるので、一方的にお恨みになることもできない。」

夜はたいそう更けて行くが、この怪しんで吠える犬の声が止まず、供人たちが追い払いなどするために、弓を引き鳴らし、賤しい男どもの声がして、「火の用心」

などと言つのも、たいそう気が気でないので、お帰りになる時のお気持ちには、言葉では言い尽くせない。

「どこに身を捨てようかと捨て場所も知らない、白雲が、かからない山とてない山道を泣く泣く帰って行くことよそれでは、早く」

と言つて、この人をお帰しになる。「ご様子が優雅で胸を打ち、夜深い露にしめつたお香の匂いなどは、他にたとえようもない。泣く泣く帰って来た。

「第六段 浮舟の今生の思い」

右近が、きつぱり断つた旨を言っていると、君は、ますます思い乱れることが多くて臥せつていらつしやるが、入つて来て、先程の様子を話すので、返事もしないが、だんだんと泣けてしまったのを、一方ではどのように見るだろう、と気がひける。翌朝も、みつともない目もとを思うと、いつまでも臥していた。頼りなさそうに掛け帯などかけて経を読む。親に先立つ罪障を無くしてください」とばかり思う。

先日の絵を取り出して見て、お描きになつた手つき、お顔の美しさなどが、向かい合つていようように思い出されるので、昨夜、一言も申し上げずじまいになつたことは、やはりもう一段とまさつて、悲しく思われる。「あの、のんびりとした邸で逢おう、と末長い約束をおっしゃり続けていた方も、どのようにお思いになるだろう」とお気の毒である。

嫌なことに噂する人もあるだろうことを、想像すると恥ずかしいが、浅薄で、けしからぬ女だと物笑いになるのを、お聞かれ申すよりは「などと思ひ續けて、

「嘆き嘆いて身を捨てても亡くなつた後に、嫌な噂を流すのが気にかかる」

親もとても恋しく、いつもは、特に思い出さない姉妹の醜いのも、恋しい。宮の上をお思い出し申し上げるにつけても、何から何までもう一度お会いしたい人が多かつた。女房は皆、それぞれの衣類の染物に精を出し、何やかやと言つているが、耳にも入らず、夜となると、誰にも見つけられず、

出て行く方法を考えながら、眠れないままに、気分も悪く、すっかり人が変わったようである。夜が明けると、川の方を見やりながら、羊の足取りよりも死に近い感じがする。

「第七段 京から母の手紙が届く」

宮は、たいそうな恨み言をおっしゃつていた。今さらに、誰が見ようかと思つと、このお返事をさえ、気持ちのままに書かない。

「亡骸をさえ嫌なこの世に残さなかつたら、どこを目当てにと、あなた様もお恨みになりましよう」

とだけ書いて出した。あちらの殿にも、最後の様子をお見せ申し上げたいが、お二方に書き残しては、親しいお間柄なので、いつかは聞き合わせなさうことは、とても困ることだどつ。まるきり、どうなつたのかと、誰からも分からないようにして死んでしまおう」と思い返す。

京から、母親のお手紙を持つて来た。

「昨晚の夢に、とても物騒がしくお見えになつたので、誦経をあちこちの寺にさせたりなどしましたが、そのまま、その夢の後で、眠れなかつたせい、か、たつた今、昼寝をして見ました夢に、世間で不吉とするようなことが、お現れになつたので、目を覚ますなり差し上げました。十分に慎みなさい。人里離れたお住まいで、時々お立ち寄りになる方のご正室のお恨みがとても恐ろしく、気分悪くいらつしやるときに、夢がこのようなのを、いろいろと案じております。

参上したいが、少将の北の方が、やはり、とても心配で、物の怪めいて患つていますので、少しの間も離れることは、いけないときつく言われていますので。そちらの近くの寺にも御誦経をさせなさい」

とあつて、そのお布施の物や、手紙などを書き添えて、持つて来た。最期と思つている命のことも知らないで、このように書き綴つてお寄越しになつたのも、とても悲しいと思つ。

「第八段 浮舟、母への告別の和歌を詠み残す」

寺へ使者をやつた間に、返事を書く。言いたいことはたくさんあるが、気がひけて、ただ、

「来世で再びお会いすることを思いましよう。この世の夢に迷わないで」
誦經の鐘の音が風に乘つて聞こえて来るのを、つくづくと聞き臥していらつしゃる。

「鐘の音が絶えて行く響きに、泣き声を添えて、わたしの命も終わつたと母上に伝えてください」

僧の所から持つて来た手紙に書き加えて、

「今夜は、帰ることはできません」

と言つので、何かの枝に結び付けておいた。乳母が、

「妙に、胸騒ぎのすることだわ。夢見が悪い、とおっしゃつた。宿直人、十分注意するように」

などと言わせるのを、苦しいと聞きながら臥していらつしゃつた。

「何もお召し上がりにならないのは、とてもいけません。お湯漬けを」

などといういろと言つのを、よけいなおせつかいのようだが、とても醜く年とつて、わたしが死んだら、どうするのだから」「とこ想像なさるのもとても不憫である。この世には生きていられないことを、ちがうと言おう」「などとお思いになるが、何より先に涙が溢れてくるのを、隠しなすつて、何もおっしゃれない。右近は、お側近くに横になるうとして、

「このようにはかり物思いをなさると、物思つ人の魂は、抜け出るものと言いますから、夢見も悪いのでしよう。どちらの方がとお決めになつて、どうなるにもこうなるにも、思つ通りになさつてください」

と溜息をつく。柔らかくなつた衣を顔に押し当てて、臥せつていらつしゃつた、とか。